

* 北海道知的障がい児・者家族会連合会 ～2019年度 第1回研修会～

2019年5月26日(日)10:00～12:00 札幌市教育文化会館 4F 講堂において、研修会を開催しました。参加者は104名でした。

【講師】社会福祉法人侑愛会 侑愛荘 祐川暢生施設長

【テーマ】高齢知的障がい者への支援について

【研修会まとめ・感想】

道南の北斗市にある「おしまコロニー」という広い法人エリアの中に、高齢期の知的障がい者の支援に特化した障がい者支援施設「侑愛荘」があります。

侑愛荘は、昭和51年開設され、現在75名の方が住んでおられ、平均年齢は71.3歳です。

支援区分も平均5.6との事ですが、「楽しく、生きていてよかった」と利用者が思える支援を心掛け頑張っておられる様子がお話の中から伺えました。

「高齢化・老化する様子について」「制度の狭間におかれた高齢知的障がい者」「支援のポイント」「終の棲家・看取りについて」の4つのテーマで進められ、昨年の道家連のアンケート結果にも触れていただき、親家族の心配事である看取りについても詳しく話されました。

「高齢化・老化について」のテーマでは、一般成人に比べ、10～15歳は老化が進んでいること、高齢化とともに疾病罹患率(病気をもっている率)があがること、一般成人に比べ疾病罹患率が3～10数倍多いことなど、データから説明があり、症状に気付けない、訴えられないことで病気の発見の遅れと悪化につながるのでは、と話されました。「70歳の壁」を感じているとのことで、身体能力の低下、虚弱(フレイル)の段階に応じて支援の仕方を変えていかねばならない、と職員間で共有しているそうです。介護度が上がった方へは、利用者が生きていてよかったと思える支援、笑顔がある生活を送れる関わりへ「支援のギアチェンジ」を行っているとのこと。具体的にトイレの工夫や生活環境の整備など、写真も交えお話下さいました。

また、一般の高齢者と知的障がい者ではこれまでの生活史が違うため、介護保険でのサービスとは違う障がい者に特化した支援が必要と話されました。例えば、高齢の女性が人形を抱っこして歩いている、結婚して育児経験のある女性は育児を思い出して人形を抱っこしているが、知的障がいがありその経験がない方であれば幼い子供のように遊びとして人形を持って行動しているので職員の関わり方も違う、というものです。

「制度の狭間におかれた高齢知的障がい者」というテーマでは、老人保健法、介護保険法のどちらにも知的障がい者のニーズに対する規定がなく、総合支援法にも高齢期のニーズに対する規定がない、という法整備の狭間の話もされました。生まれつきの知的障がいに対して、自動車保険と同じように掛け金を払って保険をかけ、自己負担をはらって使う介護保険は仕組みとして合わないのではないか、と話され大変納得しました。その他、特別養護老人ホームへ移行した方の調査結果など、たくさんのお話を分かりやすく説明いただきました。

最後に、Kさんの看取りを施設でされた時の映像をご家族の了承のもと見せていただきました。

職員の奏でるハープの音色につつまれ、職員のあたたかいまなざしに見送られたその方の旅立ちは、その方の人生が尊重され、かけがえのない一人の人として支えられた最期と思われ、いつまでも職員、仲間の胸の中に残るものであったろう、と涙がでました。私達家族も、自分も、どう人生を終えるかを考えると共に、障がいのある家族をどう支え、見送ってほしいか、真剣に考えなければならないと感じる、大変貴重な研修会になりました。

祐川施設長、本当にありがとうございました。